

学生インタビュー記事「英語で卒論を書いてみて」

平田 政晴さん 2020年3月卒業

アドバイザー：オルバーグ教授

メジャー：哲学・宗教学

卒業論文タイトル

ポーモンによる『エミール』告発から考える

ルソーの自然的善性

2020年2月13日インタビュー



スタッフ：今日はインタビューを受けてくださりありがとうございます。

ICUは2023年までに、「英語で卒業論文を書く学生を45%にする」という目標を立てています。因みに、2018年度は33%でした。一方、日本語執筆した学生の約4割が「英語執筆を迷った」と答えています（2018年度卒論の執筆言語に関するアンケート結果）。この「英語で書こうか迷った」学生が、英語執筆に挑戦できるような後押しを、CTLではしていきたいと考えています。是非、後輩の参考になる、平田さんの経験をお話してください。

質問1：大学入学まで、どのように英語を勉強してきましたか。

平田：高校の英語の授業以外では、YouTubeで配信されている「Kurzgesagt – In a Nutshell」で勉強しました。科学についての10分くらいのアニメーション、例えば「光とは何か」などがトピックです。英語の字幕がついています。

また、Khan Academy（カーン・アカデミー）のオンライン授業を受けました。主に数学についてです。英語が分からなくても自分の数学の知識で理解できたり、英語と数学両方の勉強になりました。また、生きた英語もこのサイトで学びました。

スタッフ：高校時代、理系だったのですか。

平田：いえ文系です。

質問2：いつ、英語で卒業論文を書こうと思い始めましたか。また、決めたのはいつですか。

平田：4年生の4月に、卒論アドバイザーのジェレマイヤ・オルバーグ先生（哲学・宗教学、平和研究）から英語で書くことを勧められ、その時に決めました。

まず春学期に10ページ書くように指導されました。とても大変だったので、日本語に変えようか迷いましたが、英語で続けました。

スタッフ：4月から書き始めるのは一般的ですか。

平田：先生の指導によって違うようです。まずは、最初に調べて、その後書き始めるという友人もいました。

スタッフ：では、平田さんは文献を調べるのと執筆、同時並行だったのですね。

平田：はい。私の卒論の題材はルソーの「エミール」です。原書はフランス語で書かれているのですが、私はフランス語が読めません。そのためまず日本語訳を読んで理解し、引用は英訳されたものからしました。その他の資料文献は、自分で探したものは日本語が多く、オルバーグ先生からは英語のものを勧めていただきました。

日本語でインプットして、日本語で書いて、それを自分で英訳しました。日本語でインプット、英語でアウトプットも試みましたが、日本語でインプットするとどうしても考える作業が日本語になるため、結局日本語で書いて、英訳する方法をとりました。

スタッフ：大変でしたね。

平田：はい、時間と手間はすごくかかりました。しかし、手間はかかるけれど、この方法の良いところもありました。日本語で書いたものを英訳する段階で、曖昧な部分があることに気づきました。日本語ではなんとなく、雰囲気でもとめられていたものが、英語にすると誤魔化せない部分があり、内容を再考する機会になりました。

質問3：ELAでの学びはどうでしたか。特にライティングの学びについてどうでしたか。またストリームを教えてください。

平田：ストリーム3でした。ELAの授業では、ARW Academic Reading & Writing（読解と論文作法）やRW Research Writing（論文作成）で、論文の枠組み、書き方、どういう動詞を使ったらいいか等を学びました。

ELA履修生のため、大学では論文の書き方については、日本語より英語での執筆について多く学びました。また、言語としては、英語の方が日本語よりも論文執筆に適しているかもしれないという感想も持っています。

質問4：基礎科目、専門科目では、英語ライティングの課題が重要視されているコースをとりましたか。

平田：2年生の時に、オルバーグ先生の哲学概論（PHR106）の英語開講の授業で、中間と期末に二回レポートの提出がありました。

スタッフ：ELA で論文執筆について基礎を身につけ、専門を学び、卒論につながったのですね。

平田：専門科目のレポートや卒論は、専門分野についての執筆ですが、ELA は違います。専門分野は、日本語で知識を得て、英語で書くことも出来ましたが、ELA の課題は英語でしか文献がなく、そこは違いました。ELA は英語でインプットして英語でアウトプットでした。

質問5：プルーフリードを利用されていたと思います。どの様にこのサービスを知りましたか。Eメールプルーフリードと面談プルーフリードの両方を利用されていますが、どのように使い分けていましたか。

平田：オルバーグ先生に勧めていただき利用し始めました。最後までほぼ書き上げてから、利用しました。最初に利用したのは1月17日でした。まず1日に見てもらえる制限が1500ワードのため、何日かかるかを計算して、Eメールサービスだけでは終わらないと気づき、面談も利用し始めました。しかし、実際両方利用してみると、Eメールは、プルーフリーダーが理解できない箇所があると「ここが分からない」というコメントだけが帰ってきます。一方面談は、理解できない場所を指摘してくれ、改善の提案を面談でもらえます。そのため、面談プルーフリードでは「自分が頑張りたいところ。面白いと思うところ。」を見てもらい、Eメールはそれ以外の箇所をお願いしました。

質問6：プルーフリードの必要な時期や、英語で卒論を執筆するにあたり、他にどのようなサポートがあればいいと思いますか。

平田：私は、ほぼ書き終えた時点でプルーフリードを利用し始めましたが、書き始めの春学期から利用出来たらよかったですと思います。

他のサービスは思いつきませんが、プルーフリードが実際どのようなサービスなのか、具体的に知れるといいと思います。プルーフリードサービスがあることは、デジタル・サイネイネージなどで知っていましたが、自分には関係ないと思っていました。ウェブサイトなどで、

プルーフリードされたテキストの見本が見られると、もっと学生の利用につながるのではないのでしょうか。

(スタッフ:平田さんのアドバイスを受け、テキストの見本を公開することになりました。)

質問7:卒論を書き進めて、一番つらかった時期はいつ、なぜですか。

平田:冬休み前後、それまでよりペースを上げて最後の10ページを書いていた時です。春学期10ページ、夏休み20ページ、秋学期10ページ、冬学期10ページ、そしてさらに10ページ書きました。

スタッフ:大変でしたね。書いてよかったですか。

平田:はい。ルソーが「エミール」の前に発表した「人間不平等起源論」に遡り、書きました。その結果、「エミール」という作品についての新たな考察を深めることが出来ました。

スタッフ:短期間で「人間不平等起源論」を読み、10ページ書いたのですか。大変でしたね。

平田:はい。でもやってよかったです。

質問8:書き上げてみて、今の気分はいかがですか。達成感は。

平田:製本された卒論をみて、「おおー」と思いました。結局60ページ書いたので、厚みもあり、達成感を感じました。

質問10:平田さんにとって、卒業論文を英語で執筆するという事はどういうことでしたか。

平田:時間と手間がかかる作業でした。しかし、その面倒な作業の中で自分が書きたい事への理解も深まりました。

スタッフ:春学期、英語執筆を選んだ自分にいま声をかけられるなら、何と言いたいですか。

平田:1日200語でもいいから、少しずつ書くように言いたいです。

質問11:卒論を英語で書くか迷っている後輩たちに対して、アドバイスをお願いします。

平田：英語か日本語かは、表現の一つであって、一番大切なことは「自分が書きたい事」が分かっていることだと思います。しかし、私はもし日本語で書いていたら、曖昧な表現に逃げ、書きたいことを追及せず、怠慢になっていたかもしれません。英語で書くことにより、「自分が理解していない箇所」が分かり、考えを深める努力や推敲が出来ました。また、プルーフリードを利用し、自分が言いたいことが読み手に伝わっていないと分かることで「読む人の目線」で執筆する姿勢も持つようになりました。

「英語での論文執筆は日本語に比べ参考資料の情報量が多い」「MLA や APA などスタイルが確立されていて、共通の基盤に則って書けばよい」「グラマリーや RefWorks などのツールも利用できる」などの利点もありました。

スタッフ：後輩へ、もうひとつアドバイスをください。

平田：英語卒論執筆は意外とやったらできる。

スタッフ：平田さん、貴重なご経験を共有いただき、ありがとうございました。